

ウジェーヌ・ビュルヌフ、 仏教研究の父

ドミニック・トロテイニヨン

ウジェーヌ・ビュルヌフ（一八〇一—一八五二）は、
仏教と仏教経典については二冊の著作しか出していな
い。しかしながら、実に素晴らしいこの二つの著作は、
西欧における「仏教研究」の出発点を印しただけでは
なく、二百年後の今でもなお実質的な価値をもち続け
ている。二冊とも未完の部分があり、一冊は彼の死後
に遺作として出版され、二冊目も三部作の一卷目でし
かなかつた。とはいえ、この二冊の著者について、単
に「優秀な人物であった」と言うだけですませれば、
それはあまりにも控えめすぎる表現であろう。

一八〇一年四月八日、パリで生まれたビュルヌフは、
ルイ・ル・グラン高校やパリの古文書学校（*École des*
Chartes）の教授たち、コレージュ・ド・フランス初のサ
ンスクリット講座の教授となったアントワンヌ・レオ
ナル・ド・シエジー、さらに、サンスクリットの専
門家であった父のジャン・ルイ・ビュルヌフから、素
晴らしい古典教育を受ける機会に恵まれた。彼は人生
の三十年以上を、インド・イラン語派の言語とその文
献の研究に捧げた。ノルウェー出身のドイツの学者ク
リスチャン・ラッセンと共同で、パーリ語についての

No Image

ダヴィッド・ダンジェ (David d'Angers) によるビュルヌフの肖像メダル。1840年作 (from Wikimedia Commons)。

著書を著した初めての人でもある。その共著『パリー語、あるいはガンジス川の向こうにある半島の聖なる言語についての論考 (Essai sur le pâli, ou langue sacrée de la presque île au-delà du Gange)』は一八二六年に出版された。彼はまた、一八二九年より、ゾロアスター教の聖なる言語であるゼンド語(「アヴェスター語」)を研究し、それを解明しながら、ゼンド語に関する研究論文や翻訳など数多くの重要な著作を初めて発表した人でもある。なかんずく、ビュルヌフについて特筆すべきことは、イギリスよりネパール宮廷へ派遣されていたブライア

ン・ホートン・ホジソンから一八三七年にパリのアジア協会に送られてきたサンスタリットの仏教写本のコレクションを、ヨーロッパで初めて読み研究した人物が彼であったという事実である。

『インド仏教史序説』と『良き法の蓮華』

一八三七年四月二十日ごろ、ホジソンが送った最初の二十四巻の写本がフランスに到着した。同年七月十日には六十四巻の写本がアジア協会に届き、次いで五十九巻の写本がビュルヌフのもとに送られてきた。合わせて百五十以上の写本が送られてきたわけだが、その中には、最重要の大乗仏教文献に含まれる『八千頌般若波羅蜜多經 (Pratīparimitā)』、『華嚴經入法界品 (Gaṇḍavyūha)』、『阿弥陀經 (Sukhāvatīyūha)』、『楞伽經 (Laṅkāvatāra)』、『方広大莊嚴經 (Lalitavistara)』、『ヴァスバンズウ(世親)の『阿毘達磨俱舍論 (Abhidharmakośa)』、またシャーンティデーヴァ(寂天)の『入菩提行論 (Bodhicaryāvatara)』などがあり、もちろん『法華經 (Saddharmapundarīka)』も入っていた。

一八三七年四月二十五日、ビュルヌフは、より重要な法華経を専ら研究することを決意した。その年の六月五日付のホジソン宛ての彼の手紙には、「すでに法華経の大半を読み、二つの章を訳した。全てを理解できただけではないことは認めるが……。法華経についての『分析』あるいは『考察』を、できるだけ早く出版しようとの考えがすでにある」と述べられていた。二年後、法華経の全訳が完成した。約三百ページで、百五十ページの注が付いていた。しかし、彼はこれを出版しなかった。一八四一年のホジソン宛の手紙で、ビ

No Image

ビュルヌフによるフランス語訳『法華経』（一八五二年刊）。
ヨーロッパの言語への初めての翻訳であった

ユルヌフは、まず、この『風変わりな』本についての序論を書きたいと述べている。これが、一八四四年に出版された『インド仏教史序説』である。六四〇ページに及ぶものであるが、これでも彼が企画していた作品（『三部作』の第一部にすぎないのである！）本書では主としてホジソンから提供されたサンスクリット写本に基づき、自らの仏教分析を紹介しているビュルヌフであるが、パリー語のテキストに基づく分析によって補完することを望んでいた。本書に続いて、両言語のテキストの比較研究、さらにインドとインド以外の地への仏教普及についての「歴史概論」が出版される予定であった！しかし、数百ページにも及ぶ翻訳を含めた資料はすでにできていたにもかかわらず、亡くなる前に、それらを完成させる時間が彼にはなかった。わずかに十五年間で、ウジェーヌ・ビュルヌフは、サンスクリットとパリー語のテキストの興味深いコレクションを読み、自分のものとし、理解し、訳したのである。しかし、著作『インド仏教史序説』で紹介された数多くの長文の抜粋を除けば、出版されたのは『良

き法の蓮華 (*Lots de la Bonne Loi*)』〔法華経〕の完訳だけである。この本は一八五二年、彼が亡くなった年に、未完の遺作として出版された。なぜなら、ビュルヌフは、それに二十以上の「注釈」を付けたいと思っていたからであり、しかも、その注釈だけで、九百ページもの本の半分に及ぶ長さであった！

仏教を「インドでの歴史的事象」と見る

ビュルヌフの遺産は、彼の行った優れた改革に體現されている。彼はサンスクリット研究の分野に初めて仏教研究を持ち込み、仏教をその「母国語」で学ぶことを求めた人物であった。ブツダの教えを紀元前のインド、すなわち仏教が生まれた歴史的、地理的、文化的状況に戻すことを彼は望んだ。なぜなら、彼にとつて仏教は「完全にインドで起こった事象」であったからである。したがって、仏教は神話的な宗教としてではなく、歴史的な出来事として研究されなければならぬと彼は確信していた。それで彼は、テキスト研究を通して、仏教についてのできる限り最も確かな年代

記を確立するまで研究をやめなかったのであろう。ビュルヌフのおかげで、仏教は、キリスト教の後、初めて宗教史研究の対象としての宗教になった。このことは、彼の『序説』のタイトル(インド仏教史序説)によって、また、コレージュ・ド・フランスの教授就任演説での「哲学と歴史なくして本物の文献学はありえない」との彼の言葉にも明らかである。

しかし、このようにブツダに関して歴史性に焦点を定めたことは、あまりかんばしくない反応ももたらした。ビュルヌフは、ブツダを道徳家と見なし、ブツダの教えを一つの哲学体系と見なした初めての人である。彼の著作は、欧米の学者たち、ワーグナーなど多くの芸術家、ショーペンハウエルやニーチェなどの哲学者たちによって読まれた。このようにして彼は、同時代の知識人たちが夢中になって討論できるようなテーマを与え、その影響は、常に肯定的なものではないにしても、今なお感じられる。啓蒙の世紀の後継者である彼は、「シンプルな」經典と「発展した」經典の間にある質的な違いを明確にした。彼が最も古いと考える「シ

ンブルな」經典は、道德の師であるブツタに由来し、簡明でわかりやすい言葉であらゆる人々に話しかけられたものである。それに対し、彼がより後のものであると判断した「発展した」經典は、より神話的で形而上的なものであり、一言でいうならば、より宗教的である。仏教の年代学に配慮していた彼は「原始仏教」だけを特別扱いするところまではいかなかった。しかしながら彼の仕事は、原始仏教だけを支持して大乘や金剛乘は仏教本来のメッセージの歪曲ないし退廃とさえ見なす者たちに道を開いたのである。

「原資料と向き合う」「学際的手法」「慎重さ」

一方、書齋人であり仕事の鬼であった彼は、充実した内容の文通を通して、また、まれにはあるがイギリスやドイツにも赴いて、同時代の研究者たちと発見や分析を分かち合いながら、研究者たちの研究全般に常に通じているようにしていた。今日、彼が正當にも仏教研究の「創始者」「父」と見なされるとすれば、それは、取り組んでいる課題をより良く理解するため

に常に原資料と向き合うことを彼が心がけていたからである。また、彼が「テキストと歴史的・考古学的資料」を要するにあらゆる外部情報とを注意深く照合する観点を決して失わなかった⁽¹⁾からである。

彼の二冊の著作において、主として文献学的方法がとられていたにしても、そこに示されているのは、このような彼の学際的手法である。彼は、読者を疲れさせる危険があっても、疑問への解答を与えることよりも、⁽²⁾探究しつつ、考えを絶えず進めていく⁽³⁾という彼の方法へと読者を導くことに努めた。これを、テオドル・パヴィイ⁽²⁾は「文書レックスン」と呼んだ。パヴィイは書いている。「彼（ビュルヌフ）は決まって、確実性がなくなつたところで筆を止めた。しかしながら、読者が彼の著作から何らかの結論を引き出したいと思えば、それを妨げることはなかった⁽³⁾」。また今日、彼の思い込みのいくつかが時代遅れに見えるとしても、彼の不屈の厳格さ、また *hināya* (涅槃) の定義や *pratyasamupāda* (縁起) の分析などのデリケートな問題も含めて、自己の解釈に対して彼が常に慎重で控えめであったことは、称

賛せずにはいられないし、そうした態度は現代の研究
者をも啓発し続けている。

もし彼の著作がしばしば忘れ去られ、ほとんど読ま
れなくなったとしても——彼の『序説』が初めて英訳
されたのは二〇一〇年になってからであった⁽⁴⁾——、「欠
かすことのできない基本」となった彼の理念と研究方
法は、ブッダや仏教に関する学術研究全体にとって、
今なお万人が認める土台となっているのである。

〔 〕内は邦訳に際しての補注

注

(1) Jean Filiozat, “Les étapes des études bouddhiques”, in *Présence du Bouddhisme*, Saigon, 1959.

(2) (訳注) 一八一—一九六年。東洋学者。コレージュ・ド・フランスにおけるビュルヌフの後任者でもあった。

(3) Théodore Pavie, *Notice sur les travaux de M. Eugène Burnouf*, 1853.

(4) (訳注) Eugène Burnouf, *Introduction to the History of Indian Buddhism*, translated by Katia Buffertille and Donald S. Lopez Jr., University of Chicago Press, 2010.

Dominique Trotignon / パリの仏教学研究所 (Institut d'Études Bouddhiques) 所長、テラワータ仏教協会「ヴィヴェーカーラーマ」(Association Bouddhique Theravāda «Vivekarama») 名誉会長。インドの古代仏教と東南アジアのテラワータ仏教の統合と考察、またフランスにおける仏教の確立に努める。共著に『死とは終わりのことなのか? (La mort est-elle une fin?)』(2009年)があり、『宗教は発言する (Ce qu'en disent les religions)』誌には「女性と宗教」(2002年)、「世界の創造」(2004年)のテーマの際に寄稿してゐる。